足利学校書目

全

イ曾
600
178

嘉安坦撰

足利學校藏書目

大 乙 一〇〇八 墨

予往て下野州佐野邑須藤某か家に遊ふ
某頗学を好て家に蔵書あり嘗て足利
学校に往来す予に語らく学校の蔵書今
存せるもの長大篋二合にねむ享保中十三年戊申五月
台覧を経しものあり獨り其所の土田の券章
と倶に住持の僧常に座右に置て護持す
両丁非存れ矣亟に人をして買ひ携せし
めて自從ふ其貴重なるのみ故に人をして
妄に觀ることを許さすと後藤互儒と云し

門 イ 號 600 巻 178

到らば能ふべきを返へしと予常に子の為に
棄れて果遂を遂す今ま遺憾とす今
茲甲辰の秋此冊を得て是を考るに所謂
御覧本は二十八部の古籍なる事を能知る
是より先き七經孟子考文の録する所を讀て
我邦の宛委酉室なるを歎仰す亦此冊
を讀て其委曲を得るを是を昔人の紀載に
徴し漫に附考を草しぬ猶其詳なる事
は他日暇ありて糧を裹て其地に一遊し
古庠の遺風を親訪し曩代の名籍を證
問する機縁て之れを增し補ふ事を
おのづからあらんとす

天明甲辰仲秋二十二日吉安賓坦識于笪墩寓樓

安按するに十三經と云名目玉海にみえてそれ迄ハ十經に三傳を合せていへり明にいたりて更に孟子を加へ春秋ハ左氏に合して是を十三經といふ

足利學校藏書并附考

篁墩逸樵吉安資坦著

足利學校書目

尚書注疏八册

春秋左傳注疏廾五册

周易注疏十三册

毛詩注疏三十册

禮記注疏卅五册
内自卅三至四十書本

右宋板十三經之五經

尚書毛詩春秋禮記注疏

上杉安房守憲實寄附

永享十年己未

周易注疏　上杉右京亮憲忠寄附

論語皇侃義疏（以宋板寫）十冊　孟子（注疏）七冊

右二経者書本なり宋朝板鈔寫の本なりや否や未分明

都合七経（此七經ハ張なるへし七經者易經書論語孝經を加へて稱すへし……くハ孟子を加へたるを此学校の旧傳なりや古今ハ山君彝か七經孟子考文校せし時の名目を充てゝ……あるへし）

附考

上杉安房守憲實自大明而求五經正義藏之學校

記（東見）

按するに上杉憲實（永享中関東持氏の執事〔管領〕應仁元年卒せし）（足利学校を再修せし事未詳 校考ふへし）明朝より五經正義を（明の正統景泰の頃なるへし）購ひ求めて寄藏せしることを上のことし たゝし此由に據れハ尚書より礼記にいたるまてそれ四經憲實の寄する所にして周易の一部ハ右京亮憲忠の寄する所なり（憲忠ハ憲實の子たり）これハ各其經の末に識署あるなるへし（校訪問 まりくハ第月未まて記せしにや 世事の知しきてぬ如其）

据鎌倉大双紙 右京亮憲忠 憲實ハ三子幼名龍若丸

按するに今世に存する所の金沢文庫の印記本松下見林の所也し白居易集一部唐人の書せし所本也官庫に蔵られし太平御覧彰考館に蔵せし易正義並纂図鈔字の本に属するをもて継説あり知れた南宋板穀梁傳は説あるもあれハ一定といひかたし

蒐めするハ学校を修せし時なるへし　さて本朝古より此頃まて書籍 経史をはしめ本朝の書記ホいふにみな 悉く鈔寫此本をもて行されしかとも金沢文庫に蔵せし書悉く写本なりし故みえて知るへし故に特に珍寶の雕板の善本を明へ募り求られしなるへし然して明よりも宋本ハ絶て送りを遣せしにも稀にして後世の古本となるへし支那本も書ハ明朝にハ

されとも鈔本多くて板本ありさなりとよりなりけし

にありてハ稀奇の事なり他の小説雑部ホの書たに以と貴重する事なるにましてや五経正義をや其時世に数ゆる程の本あるへし然をもて珍寶れ重購れしものなるへし又此頃にてハ明朝よりてハ十三経の刻板ハなかりしと見ゆるなり其後書傳れ有るは元の本なり今本邦に将来せし十三経も正徳れ刻板 世に是を正徳板の十三経といふ

嬴

を以て最古なりと称されども元朝に
ハ各州縣に書院ありて其学田ハ
租入の嬴條をもて書を刻せしなれハ
板書殊に盛にして明の中葉に至まで
ハ元の書籍乏しからざりしとみゆ故に
十三經板刻のるゐ世にのこさるもしまや衆
月明州なとく書坊にて滅せし
まや正德の後嘉靖萬曆に尽きて
十三經の刻あるなりされハ元版の

山氏ハ紀藩の文
学にて山井善六
重鼎といひし
徂徠先生の門人

板書ともまて求るに應せ利となるは
代ゝと世に稀なる宋本をも来せし
をもしも寶典の大功なるよりぞ而
なり

鷗賢ハ學校の廃れしを興し書籍を
寄附す今足利学校に俎豆するものハ鷗や
元ハ金沢文庫を建せしも宝学に功あるに本郷
名官を祀の礼を尋るとも此人のときハ庠序の
ありハ略損記

正德ハ頒山君義井足利学より
継て根本八右衛門名遜志とともに十六の宋
本ハ五經正義及び古写本の論語
孝經孟子と並ひに市ハ国ににかえし

詩書禮易等の古写本数通越舘る
を校して今の汲古閣本の十三経と正徳嘉靖
萬暦の諸本をも是校す
校讎し正字補缺しすべて
輯めて一書とし題して七経孟子考文
補遺といふ凡三十二巻甚詳なる事ハ
物氏茂卿の序に見えたり享保の時
官刻に准して梓行せしめられ
やがて商船へ附して中土へも遣され
ありしと重刻外臺秘要方序にもみえたり其後乾

隆帝四庫全書を輯めらるゝに此書
をも編入せられたりと奈佐勝皐の話
此五経正義を宋本と定めし事ハ其書字
行正大紙墨精純にして且宋の帝の
諱字の畫を闕き又明世の諸本に脱
漏せし所をも存せしれ故をもて定め
られしと考文にいへり宋本との数徴を備へて明らかなるものしす
へて宋本ハ世にまれにしてかきを得て人のみることなき
をぬるあし事の器にして宋板の晋書の北海堂を
見きたるを帶む一見すれハ異端なし程羅經籍並考
此中にも論したけ足

此間鈔本雜本混牧未詳

文選 金澤文庫 二十一冊 永禄三年庚申北条氏康氏政父子寄附

拂するまゝ足写本なるへし

孝經大全十冊　同書本 大義 五冊

禮記十冊 鄭氏注 知一 摸点

板本

周詩書本 鄭氏 十冊

書本

毛詩八冊 一冊欠

尚書六冊 蔡氏傳

周易 王弼注 三冊

禮記 鄭氏注 十冊

大易斷例卜筮元龜一冊

易歸藏抄 秘書 六冊　易略抄七冊

斷易 秘書 六冊　魯論二冊

論語二冊　圓珠經 古注 五冊

古文尚書二冊　又一冊

毛詩正義序一冊　周易繫辭三冊

周易抄

都合二十八部

後漢書一部宋板樣 二十冊　上杉四郎 五郎 守憲房寄附

學校 月江印

月江者享保中藏書 台覽アリシ時ノ住持ノ僧也

附考

林羅山言大相國神祖御諱公之時學校書籍見有二百五十部（東見記）

按するに目にみえたる二十八部の書皆古本にして由来学校に蔵なりしを東見記二百五十部の説に拠れは僅に十か一を存せり中間散佚せるもありぬへしといへとも一つのぬけたるハ至しさるむか且其世乃須ハ書籍多くハ鈔写れ本にして

武野燭談に足利の学校衰微衰頽ゆ後又すたれ抑当初の簡策遺逸数冊京都の僧侶の手に入て残すくなしを道春らか言てのとり学校再興ある[illegible]ゆれ大御所公今に従学の有とぞしとや

書を蔵むるは甚に易からす況や元明已下の群書に於てハ至るに及ハす更に宋版の書も置れす（以て知るへきなり）蓋これハ二百五十部精廣博なる（此二十八部の書中に宋已下の書なきを）迄るに至るを試に此二十八部の冊数を撿するに正に二百五十余冊あり或ハ東見記の説せし所冊巻未の字を部の字に誤書せるもしるへからす此書し本版の古より此須れ後に

あつても経義ハ古注疏の義に従ハ
れて宋儒の説ハまた世に行はれハ経
書にありてももとより付目のかく
なりしかれとも爾雅説文等のか
き解詁の諸書まて備へすむハ省
庭かはそれらの書のみえさるハ
古者ありて今ハ散佚せしも又ある
庭かはなし

寛山下前光寺に足利に傳はる侶
搨本にて写されとふ宋板の経書

あり寛保の伝受恵助親見せしと
お拾立原翠軒著説

植字本四部依
台命足學校
改正焉

六韜 植字本 二冊
三略 同上 一冊
孔子家語 同上 四冊
貞観政要 同上 四冊
續綱目通鑑 十三冊
唐詩正聲 四冊
韓文正宗綱目 二冊
柳文 五冊
禪儀外文 二冊
長恨歌 一冊
右書従
權現樣閑室佶長老拜領之

九禾足利文書ニ
九華ニ作ル

附考

下野國足利學校ハ本ト是レ小野篁ガ舊迹跡
近代九禾老人都講ス九禾弟子宗
銀其弟子京都相國寺圓光寺佶長
老三要嗣法ス其後閑松院鐵鑯子其後
睦子居リ焉（東見記）

東照宮乃此時足利学校ニ三要と
いへる僧あり京へ上る時足利の
書を持去るゆゑ今ハ書多からぬ
三要ハ頗る才辯あるよしにて　東照宮へ
伺候す世の人これを学校と云（貝原篤信 日光名勝記附録）
安按するに佶長老又名を三要といひ
しまや此編書ハるゝハ　神祖駿城に
侍しまゐらせし此時銅字ニ活板にて群書
を印せさせ給ひし時の事也（三史貞観政要孫子なと今に省）
まも備りて駿河版と称す此編書中の活字本乃是
世又篤信か記せし所の三要書籍校
搭去のるゆゑにんるまも論せしとく足利

〽の書今存せしものゝかさねて廣博
なハあらさるへし　況や三要自ら錄
獨此書すらかく留めて今に存
せりいはてハ舊藏の古書籍不少
まじに於てハ去るへき篤信か記する
ところ御覽の談とふべし　又おのつから
神祖の御の朋字ありて印せさせ給ひし
書のうちに今の世にみれなる左傳
杜注尚書孝經なとありきれを足利本

とふ足利の古藏本を以て本となさ
れし所也とふ　今の師より此の經書を足利本と
いふ又同し時の活板にても三史
ホ此表をハ活字本とよふ今ハ名其原本の活出るを
所よりての名なりこれを以ても三史本の活出すを
より足利の舊藏になきを
ところあるを知るへし　されハ其原本になさ
まさしとて三要に命して藏本を取り来
らしめられし支の名して士人に傳永
してかくいひ告さるをえるしたるにあら
んや其餘書籍十八部。油小路大納言所寄。
〽宋儒傳註之類」土井氏遠江守所寄性理

之書。及明獻徵録之類。三十五部。其他近時所聚。如明朝孔廟圖事文類聚海篇直音之類及至近世人著作。有七十餘部。皆平常所有之書。今茲不録云。

足利學校藏書併附考 終

新編鎌倉志曰金澤文庫舊跡阿弥陀院ノ後ノ切通其前ノ畠文庫ノ跡ナリ昔北條越後守平顯時此所ニ文庫ヲ建テ和漢ノ羣書ヲ納メ儒書ニハ墨印佛書ニハ朱印ヲ押ス印文ハ楷字ニテ金澤文庫ノ四字ヲ竪ニ書ス後ニ上杉安房守憲實執事ノ時再興ス鎌倉大草子ニ武州金澤ノ學校ハ北條九代ノ繁昌ノ昔學問アリシ舊跡也上州足利ノ學校ハ承和六年ニ小野篁上野ノ國司

タリシ時ノ建立ナリ今度安房守憲實足利
ハ公方御名字ノ地ナレハ學領ヲ附シ諸書ヲ
納メ學徒ヲ憐愍スサレハ此比諸國大ニ亂
レテ學道モ絶タリシカハ此金澤ノ文庫ヲ再
興シ日本一所ノ學校トナル西國北國ヨリモ
學徒多ク集ルトアリ管領ハ源成氏ノ時ナリ
其後ハ頽破シテ書籍皆散失ス一切經ノ
切殘タル弥勒堂ニアリ
東路之記曰足利の町ハ山の下にて東西に長し

東の方ニ学校あり是門二重有り二乃門の間に桜
乃列樹をうゑたり内く乃門の内に孔子乃御
廟有りまたの庭ニ海棠桜柳梅桃さくらなと
あり御廟ハ南にむかひ面六間入口間なり漆塗
にして板敷あり白木つくりなり前ニ東階西階
ある堂上ニ木にて作りたる古き聖像をあんち
せり座像なり高二尺許聖像乃前に
左右ニ顔曽思孟の四配の神主あり朱ぬりあり
堂乃中棟へに簠簋籩豆のことく祭器

あり蓍栝蓍櫝あり神位の西は小廟あり蓍
室ありと云又神位乃東の方にも小廟ありお
ほ欄形乃出ありて天門下小社堂の神主
ありけれハ其の曽学問所なりしと云当初は
開基の所なれとハ天神主殿おきる所へし曽
の時ハいまだ学校なし其後上杉憲實神て
学校をとそて鎌倉の圓覚寺より僧を招き
主師となす二王の時より僧の学問せる者事く
寡に集り集る　東照宮の御時は学校はこ之

要こそ伝あり東への所と紀足利の書を
おさめし昔去ゆゑ今ハ書多くあらし
京の圓光寺ハ青蓮院の邊にあり彼
三要か持来りし古書今にありまた
銅印の活字一箱ありこれも
足利より持来れり　此寺足利学校にて
書を写せし　銅字なりと村井古巌
か語せしなりと大宗佑陽東氏の物語なり
三要の考二ぞ才辯ありし時に　東照宮へ伺

作也世の人是を学校と号ス中古此地学校
ニ住持する僧ハ臨済建長寺の僧也其子也
今も学校と称して学徒僧侶凡五人ありて常
に儒書をよむと云此御廟ニ社領百石并
より御寄附此年三年已前より今ニ至
御建立ありし文廟の東北方ニ門を入れて
学廟あり中の西南ニ薬師あり又西ニ
東照宮以下御位牌あり

東海談曰足利学校ハ小野篁の旧跡にあらん

嘗て此事ニ胡乱ニ思ひしか文徳天皇實録を
繙くに篁の傳を考るに陸奥守ニ任せられし
る事ハ見ゆれとも下野守に任せられし事ハ見えね
但此書ニ又識七首の諸州及両論語まて学
校ありしニ詳ニ國史ニ見えさりしハ足利
國府なとにありて官府にもあらまて又篁ニ讀書の
地ありしと云實なる證據もなし　されともそ
分類年代記ニ足利義兼（義康の子北条時政の女を娶りて義氏を生り）
嘗剏學校於足利納自中華所將來先聖

十哲画像祭器經籍等世推曰足利學校
其後經一百餘年而災源尊氏出奔西海
與菊池戰于多々良濱時默禱孔廟遂得
勝矣於是再造聖廟以崇奉之以先祖之
所捌世々不絶祭祀ありよ世説其実を作る
と謂つへし云猶孔の譲とせんと請一読此日
本史を看よ
讀史餘論曰永享八年十月信濃小笠原太膳大夫
村上中務大輔と戦ふ村上加勢を鎌倉に請ふ持氏

これに応す上杉憲實諫て小笠原ハ京都御
家人たり私に討へからすと云持氏聴かすといへとも
加勢をハやめられ是より持氏憲実快からす九年
四月持氏上杉陸奥守憲直に仰て村上か加勢と
称し武州本一揆の兵を催す是ハ憲実を
誅せんとすると世の沙汰有憲実驚て七家の兵を召
七月廿八日上野へ退かれん八月十三日持氏憲実か
家へ行て和睦す十年六月持氏の子賢王丸
元服ありて義久となつく憲実例のことく京

の諫を用ゆへしと数諫すといへともきかすまゝ
永享の時讒せらるへしとゆうて病を称して
永享十年八月十四日上州におもむく十一月持氏
一色時長を上野へさしむけ十六日そむく
武州府中に至る先九月義教綸旨を請ひ
錦旗をそへて上杉中務少輔持房を大将として
関東にさしむく九月十日箱根合戦京方
方負て幸尾越後守討死す廿七日より上杉憲実も
上州白井城をたち十九日武州分陪に陣す

持氏の軍兵心を変して先に降参の者多し其
京勢足柄を越て早川尻に至る鎌倉勢戦
破る十月三日鎌倉を立三浦時高三浦へのかる
十七日三浦介大倉谷に放火す十一月一日三浦介
鎌倉に入る義久およひ簗田河内守両人
戦ふて死す二日持氏降る四日出家義久を家
譲らんことを請ふ憲実承引せす京都へ訴ふ義
教きかす七日上杉憲直父子一色直兼自殺すその所
従憲実か為に讒せられて者多し十一年二月持氏

満貞（満兼弟 稲川殿）自殺（持氏叔 二歳さき） 廿八日義久自殺 十一
憲実ハ此事の命をこふ事数十度なれとも
免されすして自殺す人これをそしらしハ歳
豆州国清寺に閑居す 長棟と云 十二年三月持
氏の残党一色伊予守なる浪客をさそひて常州の家
の城にこもる管領清方是をせむ 持氏子
春王安王日光山にありしか此山を出て結城
中務少輔氏朝か城に入 桃田太郎か古河に籠
る 元より常野上州に起る浪客方是をせむ 同月

又京より清方を結城にむかはしむ 五月一日京より持房
をトし憲実入道をも召す 七月一色伊予守
武州に出て須賀土佐守か城を落し それより
上杉と戦て破る 信濃の大井城にある持氏
永寿王丸殿（持氏四男）を元立て留守清方に語る 上杉か
しとうつ 此月廿九日より京都勢に語て上杉憲実
援信濃守の大将結城をうちみせむ 嘉吉元
年四月十六日落て氏朝持朝父子自害 義久兵数
多く皆討死す 春王安王とらハれ十七日に古河を（送て）

同月廿日首を上洛す十六日に信州にて
春王十三安王十一なりける文安四年八月従鎌倉持氏の
子永寿王を立て初持氏自殺春王安王生捕
れて殺さる末子永寿王をハ信濃住人大井越前守
か許にかくまひ置て元服して左兵衛督成氏と云
永寿殿の名を上杉安房守憲実ハ持氏をころし
ぬりしとふ
後悔して豆州に引こもりしを重て京の催促
にて結城をも攻しむるを是にて丹後を...
二人の子出家させて川...両の男子の事を

文正元年周防国にて死したり信実小二子を
すてゝ逃しが然して跡を庵といひけるて
上杉の家人等打替...
京都へ参て...
...右京亮憲忠を名のらせ...
とかす宝徳二年四月鎌倉御氏上杉憲忠
...御氏江ノ島...全...月
和...て御氏...享徳三年十二月鎌倉にて
...憲忠...殺す...上杉...

たのご

吉田氏頼にて書写す　寛文寛[illegible]
[illegible]